
鴨居は低くて結構だ！

あびす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴨居は低くて結構だ！

【著者名】

あびす

NZ-366Q

【あらすじ】

美少女が突然駆け込んできてそのまま居候。世の男子諸君が憧れるイベントであるが、彼に起こったのはガンダムに対するガンガルのような、極めて微妙なイベントだった。
変な幼女とのドタバタコメディ。特に意味のない話。ストーリー性も特にはないです。
下品だつたりパロディあつたり。
暇潰しやトイレのお供にでもどうぞ。

#1・うましかもの

突然美少女が駆け込んできて、そのまま居候。男子諸君の誰もが憧れてやまないイベントである。

しかし、現実は非常。そんなことが起こるのはアニメや漫画、ライトノベルの世界ぐらいだ。一方で誰もがそう割り切つて生活している。

「この少年もそんな一人だ。浮倉工業高校、材料科の一年生、大内義成。^{うち よしなり}高校に入つてから、高校から徒歩10分という好位置にあるアパートに下宿をしている。周囲は大家を含め年頃の女性ばかり。これがラブコメなら恋愛フラグの一つや二つ立ちそうなものだが、一年経つても何も起きやしない。彼女たちとは友人関係はあるが、それ以上は期待できそうにない。

所詮物語は物語である。ようやくそう悟り始めた今日この頃だ。季節は春。春は出会いの季節だが、工業高校、それも機械系にいる義成に起きることはまずないイベントである。男だらけの教室は気楽でいいが、このまま高校生活が終わりそうで切なくなる義成だった。

そんなある日、義成は家路を辿っていた。進級早々の課題残業で、周囲はすでに陽が落ちている。製図ぐらい真面目にやればよかつた。そして残業中もふざけてないでさっさと終わらせればよかつた。いくらそんなことを考えても、後の祭り。

ふと、電柱の傍に人影があつた。この周囲は家と田んぼしかない閑散とした住宅地である。不思議に思った義成は、電柱の傍に近付いてみる。

「……はうあ！」

思わず叫び声が上がった。

面食らつたのも無理はない。電柱の傍の人影は、少女、いや、幼女だったからだ。そして彼女は電柱の傍に倒れている。

すわ重大事件か。義成は慌てて周囲を見渡すが、周囲には病院もなければ交番もない。周囲にあるのは河合荘だけ。

そう、義成が住んでいるアパートである。

とりあえず介抱しなれば。義成は少女を抱えてアパートの敷地に入る。義成の部屋は二階にあるが、それよりも敷地内に入つてすぐにある大家の部屋のほうが近い。幸い部屋の電気は点いている。

「白鳥さん…… 大変だ——ッ！」

そんなことを言いながらチャイムを連打する。しばらくしてから扉が開いた。

「うるさいなあ。何が大変なんだ。とうとうボリス沙汰かい？」

中から出てきたのは眼鏡をかけた女性。長身であり、大きめのＴシャツにハーフパンツのみというラフな服装だ。河合荘の大家である白鳥遼である。義成とは法事でしか会わないような遠い親戚である。

「んな訳ねーだろ！ これ見る、これ！」

義成は抱えている幼女を大慌てで指差す。それを見た遼はあからさまに顔をしかめた。

「うわ、誘拐とか……。さすがのあたしもそれは引くわ……」

「んな訳ねーだろ！！ そこに倒れてたんだって……」

「つてことは襲つたの？」

「んな訳ねーだろ！！！ どんだけ信用ないんだよ！！」

ネタだつてことはわかるが、だんだん苛立つてきた。本気で慌てている義成の様子に、遼の顔つきは真剣になつた。どうやら本気になつたようだ。

「冗談はさておき、とりあえずは様子見よっか。部屋ん中に寝かせてくれる？

「ほいきた！」

義成は部屋に上がる。中は女性の、それもアパートの大家の部屋とは思えないぐらい散らかっていた。ズボラな性格である。

とりあえず空いているスペースに幼女を寝かせる。明るい場所で

見て見れば、彼女はなかなかの美幼女である。しかも金髪ツインテール。これで吊り目なら完璧に義成のストライクゾーンだ。

これはフラグの一本でも立つかもしれない。そつち方面の趣味が

ある義成は淡い期待を抱く。

「可愛い子じやん。ギセイちゃん、期待してるでしょ」

「しないと言えば嘘になるな！」

そして、義成の趣味はバレている。先程のやり取りも、義成の趣味を受けてのものだ。なお、ギセイとは義成のあだ名だ。音読みしただけであるが、中学生の頃から使われ始め、今では完全に定着している。

「怪我とかはしてなさそうだけど……」

幼女の衣服に乱れはなく、出血もない。それで倒れていたのなら、何か病気でもこじらせたか。遼はとりあえず濡らしたタオルを幼女の額に置いた。

「う……ん……」

濡れタオルの感触で、幼女は目を覚ました。ゆっくりと上体を起こして、周囲をきょろきょろと見渡している。顔色は悪くない。

「お、目は覚ましたね」

「気分はどうだ？ 大丈夫かー？」

幼女が目を覚ましたことで、義成と遼は安堵のため息を漏らす。とりあえず警察沙汰は避けられそうだ。

ちなみに吊り目である。金髪吊り目にツインテール。義成は心中でガツツポーズを取った。

「……ここは？」

「あたしん家。^ちついでにあたしは白鳥遼、コイツが大内義成。あんたを運んだ奴」

「細かいことはわかんないが、いやーよかつた。最初は何事かと思つたけどな」

「そーですか。ありがとうございます。いやはや、あなた達は命の恩人です。神様です。正義超人です」

「正義超人つて、古いネタ知ってるわねえ」

幼女が深々と頭を下げた。すると、腹の音が鳴る。音の出所は幼女の腹だ。義成と遼は思わず吹きだした。

「何、お腹空いてるの？」

「まさか、腹が減つてたから倒れたとか」

義成は「冗談のつもりで言ったのだが、幼女が頭を下げた。どうやら図星のようだ。義成と遼は顔を見合わせる。

「……全く、人騒がせな子だね。しゃーない、何か作ってやるわ。連絡先はその後ね」

「いやー、すみませんすみません」

遼が台所に消えた。幼女と二人つきり。その状況に思わず胸が熱くなる義成である。

「おおうちよしなりさん、ですか。どうもありがとうございます」

「おー。ちなみに大内は大きいに内外の内、義成は正義の義に成功の成な。あんたは？」

「花房乱子です。花は咲いてる花、房は乳房の房……」

何気ない自己紹介かと思つたら、とんでもない単語が聞こえた。義成は思わず吹きだす。

「ちょ、仮にもちつちゃい子が乳房とか言つなよ！？ セめておっぱい……」

「それじゃ漢字わかんないでしょーが。それにエロい幼女つて需要ないですか？」

「うん、あんまりないな」

ちょっと、いや、かなり変わった子だ。いくら可愛くてもこれでは萌えない。

「乱子は乱れる子つて書きます。いやらしいでしょ」

「まあ確かにいやらしいな。乱子ちゃんの知識の乱れは子供とは思えず、嘆かわしいが」

「おお、うまい」

乱子が拍手した。義成としては適当に言つたことが褒められて、

なんだか恥ずかしい。

「いや、ちょっと優しすぎだろ！？」

「だつて大内さんは命の恩人ですよ。神様ですよ。正義超人ですよ」「いちいち長えよ！ 命の恩人だけで事足りるだろ！」

「じゃあ悪魔超人？ 不良がいい事すると凄くいい奴に見えるっていつ。いわゆる一種のツンデレ。殴り合い友情なう」「俺の言葉は心に届かなかつたかなあ！？」

「はいそこ、漫才切り上げる」

二人の会話を遮るかのように、遼がカツラーメンを持ってきた。それを見た乱子はあからさまに落胆の色を浮かべる。

「……何か作るって言つてませんでした？」

「作つたわよ。お湯沸かして、ラーメンにスープとかやく入れて、お湯注いだ

「それは料理つて言いませんよ！？」

「いや料理だる」

なんだか粗末な扱いに激昂する乱子だったが、そこに男子高校生である義成の援護射撃。

「ねー」

「なー」

「くつ、ここのズボラジモめ……ずるずる」

「結局食つてるじゃねーか」

しばらくして、乱子はカツラーメンを食べ終えた。容器の上に割箸を並べて、手を合わせる。

「じつつあんでした」

「それで、親御さんの連絡先は？ きっと心配してるよ」

最初の目的を果たすときがきた。遼が電話に向かい、受話器を上げる。しかし、乱子は頭を下げた。

そして、重苦しく口を開く。先程までの調子とは明らかに違う、深く沈んだ声。

「……私、帰る場所なんかないんです」

「 「 ？」 」

義成と遼は思わず顔を見合せた。声の調子は、ただの家出とは思えない。どう考へても警察沙汰になりそうな雰囲気である。

「 私、両親から毎日のように暴力を振るわれて……。お腹が空いてたのも、そのせいなんです。食事もろくに与えてくれなくて、お母さんからは暴力を振るわれ、お父さんからは性的な意味で暴力を振るわれ……」

乱子の声は震えていて、聞こえてくるのはあまり聞きたくない言葉の羅列。

「 ……白鳥さん、これ、ヤバいんじゃ……」

「 だな。児童相談所か、それとも110番か……」

目的変更。遼は受話器を置いて、電話帳を開いた。探すのは一番近くにある児童相談所。一方で義成も、携帯で児童相談所の検索を始めた。

その二人の様子を見た乱子は慌てて顔を上げる。

「 なんて設定はどうですか？」

「 「 は？」 」

二人の手が止まった。

「 そんなことになつてるわけがないじゃないですかー。やだなもう、ウソをウソと見抜けないとー」

「 殺す！！」

乱子のふざけた口調で、二人は怒りに打ち震える。二人が拳を固く握り締めて乱子に詰め寄つたことで、乱子は恐れをなして後ずさつた。

「 お、落ち着きましょう……？」

考えてみれば、大人一人で子供を殴りでもしたら、それこそ警察沙汰だ。二人は怒りを鎮めるかのように深呼吸をして、乱子の前に座つた。それにしても面倒な娘である。

「 で、本当の連絡先は？」

「 それですけど、私、実はこうこう者として」

乱子はおもむりに自分の髪の毛を掻むと、そのまま上に引っ張つた。

一人が面食らつたのも無理はない。

乱子の首が外れたからだ。義成は自分の目を疑つた。遼も両目を擦つている。

「私はいわゆる『デュラハン』なんですよー」

オーケー。これは夢だ。デュラハンなんて、RPGの敵やホラー

映画でしか見たことない。それもみんな男の騎士だ。幼女のデュラ

ハヽヽなヽた聞したことがない

なぐて思ひ、ものゝ田の前には幼女のドードー、ハンカチいるのである。壊をつねつてみると、普通に痛い。というよりとは夢じやない。

「」の花房乱子、一命を救われた恩義は忘れません。恩返し

いたゞります！

「おまえの仕事は、隠れの隠れで、

「それですね、予備の体を置いてたら追い出されちゃいまして。

失礼な話ですよ。まるで人を猟奇的殺人者みたいに

「いや、首のない体が部屋の中についたら、誰でも猟奇的事件と思

うでしょ。つていうかポリス沙汰になつてないのが不思議なぐらい

九

慌てている義成とは違い、遼は落ち着いている。人生経験の差か、

はたまか驚きどけの感情でアヌ指なのが

いいんですよ、性的な意味ででも！」

「性的な意味でつて、誰が首無し幼女に欲情するか！」 上級者向け

「お前、ついでに

「まあ、してる最中に首が取れたりしたら田も耕てられないなあ……」

- 1 -

なんだか普通に会話をしているが、よくよく考えてみれば乱子の首は彼女の胸元にある。生首が喋っているのだ。正直、大声を出さな

いやつてられない!

「……、ギセイちゃんを口っこぼンだから、恩返しだからこなよ」

「はあ！？ 勝手に決めるなよー！」

「やつた、義成さんならいいですよ、私！」

乱子が義成に抱きついてくる。母手が普段

乱子が義成に抱きついてくる。相手が普通の幼女なら胸が熱くなるが、生憎首の無い幼女である。おぞましくなり」それ、ときめきはしない。

「離れんか、オゾ（まし）いッ！」

「いいんですよ、氏賀 太の漫画みたいなコトしても」

乱子の体は義成に抱きついているが、首はその辺の床に転がっている。そして声は首から聞こえてくる。軽く混乱してきた。

「何の話だよ！？」

「アーティストによるアーティスト」

義成は乱子を無理矢理引き剥がし、彼女の首を体に載せる。

「よし、この状態でやつをのをもう一回」

議院へたお歸るものも少

今度は首のある状態で乱子が抱きついてきた。首さえ乗つていれば、乱子は普通に可愛い。義成は思わず胸が熱くなつた。

喜んでいる義成を見て気を良くしたのか、乱子は義成の胸に顔をすりすりとこすりつける。

神様ありかどう、お母さん産んでくれてありかどう、俺は今この瞬間にために生きてきたんだ。

義成は心の中で全力でガツッボリスを取った

引くわあ
……
「

なんだか遼が引いているが、そんなこと関係ない。喜べるときに喜ぶまでだ。

「あつ」

その喜びもつかの間、乱子の首がもげた。

「はうあーー！」

「あはははつーーー。 ザまあーーー！」

驚き、そして落胆する義成と、その様子で爆笑する遼。遼の中では首もげがコントのオチみたいになってしまっているのだろうか。

「いいんですよ、「ミック」に載つてゐる漫画みたいなコトしても「こ」の状態でやれるか、馬鹿生首ーーー！」

義成は乱子を無理矢理引き剥がし、彼女の首を頭に載せる。

「よし、こ」の状態でならできる！」

「Jの話をR 18にするつもりか、馬鹿」

遼が義成の頭をはたく。遼の突つ込みで、義成はなんとか正気に戻つた。

「しかし、そこまで恩返ししたがるつてこ」とは、何か裏があると見た

「ぎくつ」

「さつき追い出された、とか言つてたねえ。それで行き場がなくなつたから無理矢理住み込もうと……」

「いいんですよ、児童ポルノ法に抵触するよつなコトしても……」

遼の言葉を遮るかのように、乱子は無理矢理大声をあげた。この反応、図星なんだろ？。人騒がせな娘である。

「まあ氣の毒だし、ギセイちゃんのところには住み込んでいいよ。面白いし」

「はーーー？」

「やつたーーー！」

突然の展開に驚く義成をよそに、乱子は大喜びして義成に抱きつく。胸が熱くなる義成だったが、乱子の首がまたももげたことで正気に戻つた。

「いや待てーー！なんか俺の知らないところで話を進めるなーーー！」

「大家権限。封建社会よ、ここは」

「なら俺は革命を起すぞーーー。 民主主義をくれーーー。 暖かいパンとスープをくれーーー！」

「いいじやないですか。私、相手は選びますよ。義成さんなら『アリ』です」

「俺は『ナシ』だよ……」

こんな面倒な娘を住ませてたら、何が起じるかわかつたもんじやない。義成の強い口調で、乱子は俯いた。

「……そう、ですよね。私みたいな面白生首、誰だつて『ナシ』ですよね……」

自分で面白とか言つた。そう突つ込もうと思つたが、乱子の沈んだ声は、その突つ込みを封じるのに十分だつた。

「……『めんなさい』。『迷惑、おかげして』」

乱子は立ち上ると、深々とお辞儀をした。目尻には涙が見える。「でも、久しぶりに他人とお話しして、とっても楽しかつたです。ありがとうございました。ラーメン、おいしかったです」

そのまま出口へ向かっていく。

迷惑は去つてくれた。だが、義成の心には何かモヤモヤしたもののが残つていた。それは親切心ゆえか、ロリコンとしての下心か、それとも義成自身も知りえぬ感情か。

気付いたら、玄関で靴を履いている乱子の腕を掴んでいた。

「……待てよ」

「……義成さん？」

「俺は『ナシ』とは言つたけど、『ダメ』とは言つてねえよ

「……え？」

「恩返ししないと気が済まないんだろ？ いいんだよ、鶴の恩返しみたいなことしても」

「それ、途中で出て行かなきやいけないじやないですか

「うつせえ、細けえこたあいいんだよ！－！」

なんだか恥ずかしくなつたから、乱子の頭をはたく。頭が取れた。

「わつ！？」

「悪かった、ほら。」

それをキャツチし、乱子の体に載せてやる。乱子は少々ぼーっと

した表情を浮かべていた。

「……わかりましたっ！－ ゼひとも恩返しがせていただきまつ
！」

乱子が義成の手を握る。なんだか恥ずかしくなつて、思わず頭をかく義成だつた。

「はいはい、話がまとまつたところで撤収ー。事情が事情だから、
その子のぶんの家賃はいらないから」

「そりや助かる」

「義成さん、話がまとまつたといひで、ちよつと名前を書いていた
だけます？」

「ん？ これにか？」

「はいですよ」

乱子がおもむろに紙とペンを取り出したので、義成は深く考えず、
それにサインをする。

「これでいいのか？」

「……書きましたね？」

乱子が意地悪く笑つた。そう、とてもとても黒い笑みを。

「これで契約書にサインは済みました。以降、大内義成は私、花房
乱子を自宅に住ませることー」

「はあ！？」

「うつわ、どこぞの外人部隊かよ」

乱子が紙を広げると、そこには契約書があつた。何があるうと、
花房乱子を追へ出さないこと。要約するとそんなことが書かれてい
る。

「計画通り……」

「おい待て、わつきの涙は芝居かよ！？」

「気をつけよう。甘い言葉と、おいしい仕事」

「待て、ブンナグルス！」

そんなことを言いながら、乱子は遼の部屋を飛び出した。義成は
急いで靴を履いて乱子を追う。騙された怒りが渦巻いている。今な

ら体重の乗ったパンチが打てる。

乱子は義成の部屋の前にいた。

「さつきは騙してすみませんでした、ヨシナレス」

「すみませんでしたで済むかよ。あとギリシャ風に言つたな」「発べらい殴つてやるつかと思つていたが、美幼女である乱子の姿を見ると、殴る気が失せてしまつた。ロリコンである以上、幼女を殴ることはできない。

「でも、さつきの言葉にも、ホントのことは混じりますよ」「とりあえず聞いてやる」

「義成さんなら『アリ』ってトコですよ」

乱子が意地悪っぽくウインクを浮かべた。その仕草に、思わずドキッとした義成である。

いや待て。ドキッてなんだ。『テュラハンだから、面白生首だから、相手。

セルフ突っ込みを済ませると、義成は部屋の鍵を開ける。

「まあ……契約は契約だもんな。仕方ない、入れよ」

「えへへ、じゃ、よろしくお願ひします」

突然美少女が駆け込んできて、そのまま居候。男子諸君の誰もが憧れてやまないイベントである。

望んでいた形とは少し異なるが、義成は憧れのイベントを起こすことができた。

これが一連の騒動の始まりだとは、このときは思っておりませんでした。

#1・つましかもの（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

久々の新作です。つていうかこんなのが書いてる暇あつたら別の話書けよつて話ですが。

これは気が向いたら更新します。

基本馬鹿話なので、あまり期待はしないでいただきたいですw

#2・愛妻家の朝食

オニイチヤンアサダヨオキテ。
世の口リコンの眠りを覚ます呪文である。無論、幼女以外に使える者はいない。

そして、ここにも一人、その呪文を使いこなす者がいた。

「お兄ちゃん朝だよ！ ほら、さつわと起きて！ 遅刻しちゃうよ！」

幼女の声が聞こえた。まさかと思いつつ、義成はゆっくりと目を開ける。そこには、布団の上にちよこんと置かれた幼女の生首があった。

そう、昨日居候させた羽田になつた、デュラハンの花房乱子。彼女の首だ。

「はうあ……！」

一気に目が覚める。得意げな表情の乱子がなんだか腹立たしい。「ふつふつふ、どうですか。これぞ花房式目覚まし。この可愛い声で起きられるだなんて、幸せ者ですね」

時計を見ると午前7時15分。学校は8時40分からであり、学校までも歩いて10分の距離なので、普段は8時前に起きているといつのに。とりあえず罰を与えるべく、乱子の首を持ち上げる。

「はや？ 一体どういう心境ですか？ わては！」褒美のちゅー！？
いやん、まだ心の準備というものがつ」

なんだか変なテンションの乱子は無視しつつ、ベッドの側にある箪笥のてっぺんに乱子の首を置く。箪笥の高さは義成の身長よりや高く、乱子の体では到底届かない高さだ。

「え！？ ちょ、ま、おーるーしーてーくーだーむーいー！」

「俺の眠りを妨げた罰だ！！ 寝起きにあんなオゾイもん見せやがつてー！」

「オゾ」とはなんですか、乱子ちゃんのプリチーフライスですよー。

「欲情の一いつぐらいしてく、ださいーーー！」

「やかましい、自分でプリチーとか言つな！ しづらいやで頭冷やしどけーーー！」

一度寝には微妙な時間。それに田が冴えてしまつたので、とりあえずテーブルに向かい。テーブルの側には乱子の体。獵奇的事件を予感させる光景に思わずため息をつく。

ちなみにこのアパートは1Kに風呂とトイレ付。まあヤレヤレこの物件である。

テーブルの上には、暖かい湯気を立ててこる白飯と味噌汁、それと玉子焼きがそれぞれ一膳ずつあつた。ひょっとして乱子が作ったのか。

「おー面白生首」

「なんですか？ といふか面白生首と認めてくれたんですね？」

「いや、認めてはないぞ」

「はーはーシンデレラシンデレ」

「やかましい。朝飯作つたのか？」

「はいですよ」

久々のまともな朝食である。ここ最近の朝食といえば、食べないか食パン一枚とか、そんな貧相なものだ。久々に見る普通の朝食は、なんだかとても美味しそうに見えた。

「たまには役に立つことするじゃねーか

「任せてくれよ、生首幼女メイドにもなれまஆー」

「生首はこらんな

幼女メイドといふ言葉にはときめかざるを得ないが、生首といつ

単語一つで台無しだ。

「おい、そんなどこにこないで下つてこよ。飯にするわ」

「自分で上げておいてーーー！」

乱子がどんな動きをするのか見物すべく、あえて首を下ろしには行かない。すると、突然体が動き出し、ベッドによじ登つて、箪笥

の上にある乱子の首を取つた。

「……オゾい光景だな。つていつか遠隔操作できるんだな」「はいですよ。視界はこの目が見てる範囲だけになりますけど」結構便利に思えてきた。

乱子が義成の向かいに座る。どこからか割箸を探してきていた。「んじゃま、いただきます」

とりあえず、玉子焼きを食べてみる。中に海苔が巻いてあって、少し辛めだが、なかなかの味だ。

「……うん、意外とうまいじゃねーか」

「でしょ? 花房式玉子焼きですよ。どのくんが花房式かは内緒ですけど!」

味噌汁をすすつてみると、こちらもなかなかの味。具は若布と玉葱で、どこか懐かしさを感じさせる味だつた。

「……うーん」

「どうしました?」

「いや、なんとか知らないけど、食つたことのある味だなーって」

「おお、お袋の味を完全再現ですか」

「いいや、残念ながら、まだ及ばねーな」

義成の母親はなかなかの料理上手である。中学校の頃は弁当が美味くて助かつたものだ。

「……なるほど。では義成さんのお母様よりも料理が上手くなれば、結婚といつことですね」

「ねーよ。つていうかお前さんは結婚できる歳なのかな?」

「……ワタシハエイエンノジユウニサイ」

「棒読みじやねーか。……まあ、首取れてりやせうせう歳は取らないな」

「便利な体ですよ。義成さんもひとつひとつですか?」

「なるか!!」

いつまでもこんなやつとりをしていたら、朝食が冷めてしまつ。

それは料理に失礼だ。とりあえず食事に集中しよう。

そんな義成の姿を見てか、乱子も食事を始めた。

「んじゃま、行つてくるわ」

義成は制服のブレザーに着替えて、玄関で靴を履く。高校指定のものは制服だけで、靴と鞄は自由。というわけで、靴はスニーカー、鞄はトートバッグ。教科書は全部学校に置いているし、昼食は学食にしているので、学校に持つていくのは筆箱だけだ。おかげさまで学校のロッカーは教科書に体操服に作業着にと手狭である。

「はいはーい。遅くなるようでしたら電話してくださいね？」

「いや、電話ねーし」

義成の連絡手段は携帯電話のみ。その携帯電話も学校に持つて行っているので、部屋への連絡手段は全く無い。大家の遼に伝言を頼むという手もあるが、彼女はズボラなので忘れられる可能性が高い。なお、学校は携帯禁止である。持つて行つても常時マナーモードだし、時計代わりにしか使わないのだが。

靴を履いて外に出ると、隣の住人と出会った。

「あ、ギセイ君おはよ」

「ども。花さん、今日は早いつすね」

隣の住人である風間花。かざま はな隣の市にある大学に通う大学二年生。小柄かつショートカットで、どこか小動物のような印象を受ける。

「いやー、ちょっと約束があつてねえー。ところでギセイ君、なんだか女の子の声がしたんだけど……」

「ぎくっ！……」

まずいところを聞かれた。乱子は首さえ取らなければ普通の幼女に見えるのだ。警察沙汰になつてもおかしくない。

「ひょっとして、コレ？」

花はにやりと笑うと、小指を立ててくる。

「違います、違います」

ああ、これが冤罪なんだな。何が悲しくてあんな面白生首と付き合わねばならんのだ。

義成は心中でそう呟いた。

「まあ、ほどほどにねー。んじゃ、電車来るから、またねー」

「はーい……」

なんだか誤解したまま、花は駅方面に走つていった。中高と陸上部だつたらしく、足は速い。

「朝つぱらから疲れちまつたな……」

こんな賑やかな朝は久しぶりだ。学校までの道が非常に氣だるく感じられる。

歩くにつれ、同じ制服を着た人間が多くなつてきた。工業高校といつ性質か、見かけるのは男子ばかりだが。

横断歩道で信号待ちをしていると、隣に自転車が停まつた。見たことのある自転車である。

「よおーギセイさん」

「おお、一さん。おはよっさん」

同級生の三好一存。みよし かずなが 小学校からの腐れ縁。柔道部に所属しているうえに筋トレが趣味というだけあつてか、がつちりとした肉体の好漢である。

そんな一存に隠れるかのように、自転車の荷台から少女が降りた。見たところ小学校高学年ぐらい。一存とは似ても似つかぬ美少女である。

「…………！？」 おい一さん、後ろの子は！？」

「ああ、近所に住んでる弾ちゃんはづむだ。毎朝ここまで送つてんだよ。ギセイさんは朝会わねーからなあ」

確かにこのあたりの校区である畠丸小学校は横断歩道を渡つて右、浮倉工業は左に進む。しかし、毎朝近所の少女と二人乗りで通学とは、なんとも羨ましい話だ。

「松永弾まつなが はづむです。いつも一兄かずにいがお世話になつてます」

弾がぺこりと頭を下げた。少々小悪魔な雰囲気があるが、なんと也可愛らしい少女である。実に羨ましい。

そういうしてゐうちに信号が青になり、横断歩道を渡つた。一存

は自転車から降りて いる。

「それじゃ一兄、またねー！」

「おーう」

横断歩道を渡り終えると、弾はこちらに手を振つて、小学校のほう

၁၃၂

紹介しろ！！！

「ひよーねし」

一存はからからと笑う。知人の少女に迫るのは義成の持ちネタの
ようなものであり、いつも軽く流される。義成としては結構本気な
のだが。

「それにしても、なんで毎朝送つてんだ？」

中学の頃は朝練やつてたけど、今は朝練ねーんだわ、そんなこと弾いたら、じゃあ毎朝送つてよつてことになつてな。ま

おしゃれーーングたせ

毎朝少女と一緒に自転車に乗れるなんて羨ましいイベントを筋トレとしか考えていない一存に軽く殺意を覚えつつ、浮倉工業に到着。駐輪場に向かう一存と別れ、義成は上履きのスリッパに履き替えて教室に向かった。このスリッパは何度見ても便所スリッパにしか見えない。学年ごとに色が異なり、青・灰・緑のローテーションだ。義成の世代の色は青であり、余計に便所スリッパっぽい。

「一ノ二」

通常校舎三階にある、材料科一年の教室に入る。鞄を机にかけて、今日の教科書を廊下のロッカーから取り出す。別にシャレではない。今日の科目は金属工学（専門科目）・実習Bが2コマ・昼休みを挟んで物理・英語・社会となっている。昼からが地獄だ。間違いなく睡魔との戦いになる。

実験やつて食事やつての理系科目は拷問である。

「ナニヤア、おまへー！」

椅子に座ると、友人が気だるそうに机にもたれてきた。高校からの付き合いである、井上成美。^{このひさえなるみ}坊主頭で瘦身の、いかにもスポーツマンといった趣である。実際バレー部に所属しており、技術はかなりのものだ。学力も、この高校では、中の上と、スペックはなかなか高い。

「おー、なるちゃん。眠そうじゃねーか」

「いやな、妹がな……」

妹。その言葉に、義成は田を輝かせる。成美の家に遊びに行つたときに一度だけ見たが、兄に似ず可愛らしい少女だった。確か五年下の小学六年生だそうだ。

「おい、詳しく言え。結果次第では俺はお前を殺さねばならん」

「マジか。……いや、辛木小は今日から修学旅行で乙県に行くんだが」

辛木小はここから車で二十分ほど距離にある。

乙県は隣の隣の県であり、ここいらの小学校では定番の修学旅行先だ。

「ああ、ウチも乙県だつたな」

「んでな、にーにーと一緒にじやなきや嫌——つ！……つてずっとぐずつててな。しかも俺の布団で。おかげで寝たの一時回りたぜ」

成美が遭遇したシチュエーションを想像すると、義成の心にどうす黒いものがたまつていった。

「てめえ!! そんな羨ましいシチュで何もしなかつたつていうのか——つ——！」

「何もする訳ねーだろーが!! 相手は妹だぞ!!」

「妹だからいんじやねーか!! しかもなるちゃん、にーにーつて呼ばれてんのか!?」

「まーな。いい年だからその呼び方はやめろって言つてんだが」
「にーにー。お兄ちゃんとはまた違つた、可愛げのある呼び方。

「くそ、てめえ俺と代われ!! 俺もにーにーつて呼ばれたいよ!!」

！」

「いや、実際呼ばれてみろ！？ マジでウザいぞ！！」

「にーにー」

後ろから野太い声が聞こえてきたと思つたら、一存が後ろから抱きついてきた。

「うわあああああっ！！ オゾい、死ぬっ！！」

「おわ、マジきめえ……。それはないわー……」

「おま、呼ばれたいって言つてだじやねーかよ」

義成と成美からのブーリングで、一存は義成から離れる。

「俺が呼ばれたいのは可愛い少女からであつてな、お前のような筋肉ダルマからは呼ばれたくないわ！！」

「俺も呼ばれたくないな……。一さんからはお兄ちゃんとも呼ばれたくない」

「ガハハ、俺にできることは筋トレぐらいだからなー！！」

一存が豪放に笑うと、チャイムが鳴つた。朝の十分間読書の合図である。教室の中で好き放題話していた生徒はざわめきつつも席に戻り、それぞれ本を読み出した。

一時限目が終わり、義成と成美は溶接実習室で一息ついていた。実習は出席番号順に4グループに分かれているため、一存は別のグループだ。

今日の実習は溶接の練習を兼ねた、材料引張試験。二つの鉄板を溶接で繋ぎ合わせ、それを引張試験機にかけて、溶接の強度を測定する、といった内容だ。先週の実習は、試験片に鋼球を当てる、その跳ね返りで硬度を測定するといった退屈な内容だったせいか、今週はなかなか楽しめている。

ましてや担当教師が「一番強かつた奴にジュース一本奢る」と言ったため、余計に熱が入るというものだ。我ながら単純だと思つ。

「腹減ったな、ギセイさん」

「おー。学食にチキンカツでも食いに行くか?」

「おう、行こうぜ」

チキンカツは早弁用の人気メニューである。実習なんかで「腹減つた」とのたまう奴が多いせいか、午前中の休み時間に限り提供されている。単品で90円、ご飯付きで150円と手ごろな値段なので、懐にも優しい。

そうと決まれば善は急げ。実習用の安全靴からスリッパに履き替えると、一人は食堂に走った。この高校はやたら広く、各科「こと」に三階建ての実習棟が備わっており、材料科の実習棟は敷地の北端にある。急がないと間に合わない。

食堂の前にたどり着いたところで、校内放送が鳴った。
『2・Zの大内義成君、ご家庭の方がお見えになっています。至急、事務室まで来てください』

Zは材料科の略で、他に建築科はA、土木科はC、デザイン科はD、機械科はK、電気科はEとなっている。

「お、ギセイさんだーした?」

「さあ? しゃあない、とりあえず行つてくるわ

「おー。ハタケンには言つとくわ」

「悪い」

今回の実習の担当教師は畠謙^{はたけん}。苗字ではなく、フルネームだ。そのため、生徒からのあだ名はハタケン。そのままである。ともあれ、家の人気が来ている。両親は共働きで、今の時間帯は仕事だろう。となると、思い当たる節は唯一つ。

「あ、義成さん」

予想は的中。来ているのは乱子だった。事務室の前で、なにやら手荷物を振りかざしている。

「何しに来た、面白生首」

「何つて、お弁当ですよー。せつかく作ったのに忘れるんですよん」「弁当?」

乱子の手荷物をよく見てみると、中学生の頃から使っていた、二

階建ての弁当箱だ。高校に入つてから学食ばかりで、ほとんど使うことはなかつたといふのに。とうかどこから引つ張り出してきたのやい。

「弁当つておま、俺はいつも学食だつて」「

「まあまあ、せつかく作ったんです。お金の節約と思つて」

「まあ……しゃあないな。ただ、今度から弁当作つたら朝に言えよ。

恥ずかしいんだからな、」これ

週に一回しか着ないからと一学期毎にしか洗濯しない、小汚い作業着で事務室の前にいるのは正直恥ずかしい。

「乱子ちゃんも恥ずかしいですよ。部外者が学校に行くのつて恥ずかしいんですよ」

「だからそういう恥ずかしさを覚えないように、ちゃんと弁当作つたつて言えよ。まあ、作ってくれたのは嬉しいけどな」「おおお、テレ来ましたよテレ」

乱子の茶化すようなテンションが恥ずかしいやら苛立つやい。

「はいはい、用事が済んだらさつと帰れよ。実習棟遠いんだからな」

「はーい。帰つたら感想聞かせてくださいね」

「覚えてりやな」

乱子を追い払つと、弁当を持って教室に向かつ。教室には鍵がかつているので、とりあえずロッカーに放り込むと、休み時間は残り数分。まずい。教室から実習棟までは3~4分かかるので、走れば間に合つだろひ。帰つたら乱子に文句の一つでも言おう。そんなことを考えながら、義成は実習棟に走るのだった。

実習終わつて、昼休み。いつもは作業着のまま食堂に向かつたのが、今日は弁当があるので、教室に戻る。作業着の上着を脱いで、ズボンを履き替えると、適当に畳んでロッカーに放り込む。「ギセイさんが弁当は珍しいね」

席に着くと、後ろの席の友人、織部佐助おりべ さすけが声をかけてきた。高校に入つてからの付き合いでのゲームや漫画等をよく貸してくれる。眼鏡をかけた、少々おとなしそうな雰囲気の男だ。

「おー。たまたま親が来ててなあ」

考えてみれば、教室で昼食をとるのは何ヶ月ぶりのことだろうか。高校に入りたての頃は学食の仕組みがわからず、購買のパンを教室で食べたりもしていたが、今では食堂ばかりだ。

いつも一緒に食堂に行つている成美に食後のアイスを貰つてきてもらひよう頼んでいるので、彼が帰つてくるまでに食べてしまおう。弁当箱を開ける。

まずは一階のおかず入れ。朝に出た玉子焼きの残りと、鳥の唐揚げに焼きそばだ。玉子焼き以外は冷凍食品に思えたが、よく見ると唐揚げは手作りのようだ。雰囲気からすると、成美が学校に出てから作つたように思える。おそらく急な思い付きだらう。まったく面倒な奴である。

ため息をつきながら、今度は一階の「飯入れを開ける。

「ぶつー?」

開けた瞬間、成美は思わず吹きだした。由ゆ飯の上には、海苔で作られたハート。「丁寧に海苔で「LOVE」とまで描かれている。

「ギセイさん、どしたの?」

「いや、なんでもない」

怪しまれないように、とりあえずハート部分だけをかきこむ。急にかきこんだせいか、少々むせた。

「げほげほ……。織おりやん、お茶ちょうどい……」

「何がつついでんの」

佐助に笑われながら、後ろから水筒を受け取り、麦茶を少し飲む。少し落ち着いてから、とりあえずおかずを食べてみることにした。まずは唐揚げ。まだ温かく、味付けも良い塩梅だ。これで不味かつたら批判のネタになるのだが、どうやら乱子は料理上手らしい。結局は態度しか批判できなかったため、成美は肩を落とした。

それにしても、本当にどこかで食べたことのある味である。はつきりと思い出せない、ぼんやりとした記憶。

普段の昼食は賑やかな食堂で成美や一存と馬鹿話をしながら食べているのだが、教室では特に喋ることがない。微妙に違和感を覚えつつ、なんとか完食。正直美味かつたし、腹も良い具合に膨れた。普段はチャン麵 中華麵にうどんの出汁をかけたものばかり食べているから余計にそう感じる。

弁当箱を鞄にしまい、カッターシャツの上にブレザーを羽織つていると、成美と一存が戻ってきた。一人とも作業着姿であり、いつもどおり実習を終えてから直で食堂に行つたようだ。

「お。なるちやん、トラトナあつた？」

「おう。ほい」

成美が作業着の上着のポケットから棒アイスを差し出す。チョコバナナ味の当たり付きアイスだ。最近60円から80円に値上げされたものの、小学生の頃から変わらぬ味で、好物の一つである。

「センキュー。ほい、100円」

「おひ。20円は手間賃な」

「おま、まあいいけどな」

成美に100円玉を手渡し、アイスをかじる。アイスは食堂で食べるという校則があるが、もはや有名無実と化している。まあ教室内で煙草を吸う奴もいるので、アイスぐらいはひとつひとつはいい。

すると、制服に着替えた一存がこちらに近寄ってきた。手には白いラベルのティースクがある。

「織やん、これ良かつたわ」

「お。でしよう」

「できることなら『ペーしょん』と思つたぐらいだ、ガハハ」

「なんだそれ、映画か？」

成美も着替えてからこちらに来た。

「『紳士の映画』だよ」

紳士の映画。仲間の間で使われている隱語の一つで、青少年にはふさわしくない映像コンテンツのことである。

「マジか！……ちょっと貸してくれねーか？」

佐助が持つてくる「紳士の映画」に外れはない。義成は中身が気になり、机の上に置かれていたディスクを手に取る。

「いいよいよ。どうぞ使ってください。ゲヒヒ」

「よしあ、センキュー」

これで楽しみが一つできた。義成はディスクを嬉しそうに鞄へと入れるのだった。

「ただいまー」

義成は自宅の扉を開けた。今日は定時である。

扉を開けた瞬間、おぞましい光景が目に飛び込んできた。

「はうあ！－！」

「おかえりなさい。」飯にします？　お風呂にします？　それとも……私？」

玄関先には乱子の首があつたからだ。体は何をしているのかというと、テレビの前で体操座りをしている。

「……帰るなりオゾイもんを見せやがつて！－！」

「え、ちょ、なんでキックモーションに入ってるんですかー！？」
蹴り飛ばしてやろうかと思ったが、さすがにそれは可哀想だ。とりあえず寸止めで許し、弁当箱を出す。

「お、愛情弁当いかがでしたか？」

「何がLOVEd！！　見られたらどうしようかと－－！」

「いいじゃないですか。見せびらかしてやりましょうよ。義成さんが私の首を持つて、学校に行つたらいいじゃないですか」
「少年院行きだ、この面白生首－！」

とりあえず乱子の首を体の近くに持つていってやる。すると、体

が動き出して、首を拾い上げた。何度も見ても慣れない、おぞましい光景である。

「つていうか、どうやって玄関に首置いたんだ?」

「投げ飛ばしました」

「後先考えないな。ホント馬鹿だろお前」

「おバカキヤラいいじゃないですか」

「まあ、頭が足りない幼女は可愛いがな。お前はリアルに頭足りてないから」

「おお、うまい」

ちょっと自信があったので、乱子の言葉がお世辞だろうが、なんだか嬉しい義成であつた。

「まあ、弁当自体は美味かつた」

「あら。ありがとうございます」

「L〇Vエはいらんがな」

「あれが大事なんですよ! キモなんですよ! 白眉ですよ!」

「白眉じゃない! 杞憂で蛇足だ!..」

自分で言つといて、意味がわからない。料理を褒められた乱子はなんだか嬉しそうだつたが、そこに突つ込んだらまた何かいらんことを言われそうなので、心に秘めておくことにした義成だった。

乱子が眠つたのを確認した義成は、そつと布団から抜け出し、テレビにヘッドホンをつないだ。DVD再生機能のあるゲーム機に、昼間佐助から借りたディスクをセットし、再生開始。
わくわくしながら女優の容姿を見てみると、大人っぽく、それでいて巨乳だった。

美人なことに変わりはないが、ロリコンである義成はがっくりと肩を落とすのだった。

深夜。

#2・愛妻家の朝食（後書き）

まさか続きを投稿しちゃうとは。

チヤン麺は私の主食でした。

#3・あの娘の彼

六月初頭の金曜日。

義成は実習の合間の休み時間に、成美と佐助とで食堂に来ていた。時刻は十四時五十分。あと一時間で今週も終わり。

だが、最後に待ち受けていたのはとんでもない強敵だった。義成達は缶ジュークを片手に、肩を落としている。外は雨。じめじめした気候が、三人を余計に落ち込ませた。

「……きつついなー」

現役で部活をしており、この中では一番体力があると思われる成美ですらため息をつく。彼はこの後部活も待ち受けているので、余計に気が滅入るのだろう。

今回の実習はアルミの砂型鋳造。溶かしたアルミを砂型に流し込み、铸物を作るといったものだ。今回作った物は、一年を通して作り上げる「電気スタンド」の台座になる。義成達は前回の実習で電気回路を作つており、前回はイライラするのみで体力は消耗しなかつた。が、今回は体力を滅茶苦茶消耗している。

「一さんが『樂勝樂勝、ガハハ』なんて笑つてたから、甘く見てたな……」

「考えてみれば、一さん人間じゃないからねえ……」

そう、ひどいのは暑さである。ただでさえ蒸し暑い工場内で、溶けたアルミ アルミの融点は660 を使うのだ。まだ六月であるにも関わらず、汗だくである。疲れて渴いた体に、炭酸飲料の甘味と刺激が心地よい。

別に会話もなく、ただグダグダと過ごしていると、チャイムが鳴つた。工場は食堂の隣であり、チャイムが鳴つてからでも十分間に合つ。

「あー、行くか

「だねー。あと一時間、頑張ろっか」

「部活行きたかねーなあ……」

三人はぼやきながら空き缶を「HII」箱に放り込むと、とぼとぼと工場に向かうのだった。

「ただいまー」

義成は傘を置むと、自宅に戻った。実習で汗をかいだうえにこの雨である。体がベタベタしてしうがない。さつさとシャワーを浴びよう。

「あ、おかえりなさいー」

「やー。お邪魔してるよ」

部屋の中には、乱子と遼がいた。一人で何かボードゲームをやっているようだ。乱子の首と遼が向かい合い、その間には乱子の体がいる。

「どうやら一人がやっているのは人生ゲームで、乱子の体は銀行役のようだ。確かに頭からすれば面倒ではないだろうが、結局銀行役をやるのは乱子である。頭はそれに気付いていないらしく、得意気な表情を浮かべている。

「どうですか。だれもやりたがらない銀行役も、体が別行動できればこの通り。暗い暗いと言つ前に、すすんで灯りをつけましょうの精神です」

「はいはい、すじこすじこ」

突っ込むのも面倒だ。義成は鞄を置いて、長袖のカッターシャツを脱ぐ。

「きやつーー もう、白鳥さんが見てる前で、そんな……。まだ心の準備というものがつーー でも無理矢理も嫌いじゃないですよーー そして乱子の反応は予想通り。

「何オゾいこと考えてんだ、この猥褻生首」

「あーらあらあらあらー、ひょっとしてあたしはお邪魔さんー?」

「白鳥さんまで何言つてるんだよ。シャワー浴びるだけだ、シャワ

ーを

「「シャワーって、OKサインだよね」」

二人のリアクションがハモっているのがなんだか無性に腹立たしい。とはいえ、疲れきっている体でこの二人に付き合おうとは思つていらない。義成は替えの下着と部屋着と用意すると、二人のことは無視して、シャワーを浴びに行くのだった。

シャワーから戻ってきてみると、乱子と遼はまだ人生ゲームに興じていた。なんでもまたこの二人で人生ゲームをやっているんだろうか。とりあえず空いた場所に腰掛ける。

「何でまた人生ゲームとかやってんだ？」

「いやー、暇だからさー。かといって遠出もめんどくさいし。たまたま乱子ちゃんが暇そうにしてたからさ」

「見てください、この幸せな家庭を。結婚して、子供は四人。一番上は男の子で、あとは女の子。もちろん妹は全員ブラコンですよ」「なんだよその詳細なティティール。羨ましいけどな」「あ、義成さんはお兄ちゃんじゃなくて、私の隣ですよ」

「待て、俺を巻き込むな……！」

幼女と結婚したいと思ったことはあるが、相手が乱子なら話は別だ。何が悲しくてデユラハン娘と結婚しなくてはならないのだ。

「もう、義成さんが激しいから、子供が四人も……うふふふ」

「いらんこと考えるな、オゾいつ……」

「避妊しないからだよ。やればできるのに」

「白鳥さん、下品すぎるわ……！」

「義成さん相手なら無防備でも……」

「だからやめんか……！」

下ネタは嫌いではないが、このままだと際限なく下品な方向に話が進みそなので、乱子の頭をはたく。下ネタ好きな幼女とかあるいはない。

遼の駒を見てみると、終盤にも近いところに独り身だった。珍しいこともあるものだ。

「で、白鳥さんは独身なんだな」

「はい、家賃一割増」

「待て待て待てえ！？ なんでそうなる！？」

なんとなく感想を述べただけなのに、いきなりの家賃上げ。あまりにも理不尽な事態に、義成は困惑する。

「やだねえ、冗談よ、冗談」

「目が笑つてないんすけどー！？」

結婚という単語はNGワードらしい。いつか本氣で家賃を上げられそうな気がするので、これからは気をつけよう。

「まあまあ、義成さんもどうですか？」

「そうだな、せつかくだし」

考えてみれば、人生ゲームなど久しぶりだ。こんな機会でもないとやらないだろ？ 義成は駒を用意すると、ルーレットを回すのだった。

一時間後。

「あ、やっぱ、そろそろ帰つて仕事しないとまずいなあ……」

「仕事あつたのかよ！？」

遼はイラストレーターで、アパート管理は副業のようだ。といふかさつき「暇だから」なんてのたまっていたような気がする。

「まあ、気分転換には成功。さ、片付け片付け

「せつかくサッカー選手になつたのにな……」

「あれ、義成さん、サッカー選手が夢だつたんですか？」

「小学校の頃はな」

サッカー選手という職業は小学生男子にとつては憧れの職業の一つである。義成は今でこそ特殊な性癖を持つてしまつたが、小学生の頃は普通だつたのだ。

「今からでも遅くありませんよ！ 私が練習に付き合つてあげます！ そして疲れた義成さんに寄り添うんです！」

「じゃあショートの練習をするか」

「ちょ、私の首は恋人なんですよ…… ボールは友達ですから、恋

人と友達の違いは大きいです！！」

「あんたら、漫才よりも片付けやりなさいよ」

「「はーい」」

人生ゲームは片付けが一番面倒臭い。散らばつたお札を集め、ケースに戻していく。言いだしつべの遼は何もせず、指示だけ。刃向かいたいが今の力量では返り討ちに遭うのがオチだ。反逆の衝動をぐつとこらえる。

「よし、おつかれさまー。んじゃね、おやすみー」

「はーい、おやすみなさい」

遼は人生ゲームを持つて、義成の部屋から出て行つた。時計を見るといい時間である。腹も減ってきた。

「あ、もうこんな時間ですか。」『飯作りますね』

「おーう

色々とアレな乱子であるが、こいつこいつは素直に役立つと思える。料理の腕は良いのだ。

夕食ができるまで横になつてテレビを見ていた義成だったが、突然携帯電話が鳴つた。

「あ、鳴らないケータイが」「やかましい」

電話の主を確認すると、成美であつた。部活帰りだらうか。とりあえず電話に出る。

「うえーい

『おお、ギセイさんか。電話よかつたか？』

「おー、暇してた。どした？」

『いやな、織やんの『紳士の映画』、次はギセイさんだっただろ』

『そりだよ。今日なるちやんが忘れるから……。楽しみにしてたん

だぞ』

先日佐助が持つて来ていた「紳士の映画」は非常に評判がよく、一存も絶賛していた。借りることになつた義成も楽しみにしていたのである。

『悪い、持つて来てたわ』

成美は口ではそう言つてゐるが、全然悪びれた様子はなかつた。おおかた鞄の中に入れっぱなしで忘れていたのだろう。

「おま、何忘れてんだよ」

『いや、悪い悪い。今から持つていくわ』

「今から？ もう遅くねーか？」

『いや、今ギセイさん家の前だし』

「おい」

つい笑いが出た。成美は原付登校なので、この程度の寄り道はなんともないのだろう。

「まあいいわ。待つてる」

『オーケー』

そこで電話は切れた。気付けば乱子がエプロンで手を拭きながら横にいる。

「どうしたんですか？」

「友達が来る。……あ、お前の存在を忘れてたわ」

「ちょっと、嫁たる乱子ちゃんを忘れるとは何事ですか！ いいですよ、見せ付けてやりましょうよ！ 私と義成さんのラブラブつくりを！…」

「別にラブラブもしてないわ！ いいか、絶対首とかもぐなよ！」

「わかつてますよー。他人の前で首をもがないとか、常識じやないですか」

「その常識が通用しないから言つとるんだ」

そもそも首がもげるということ自体が非常識といふことには気が付いていない義成だった。慣れというものは恐ろしい。

チャイムが鳴つた。成美が来たのだろう。玄関に迎えに行く。

「よーい」

「おー、お疲れー」

予想通り、制服姿の成美がいた。学校帰りだからか、カッターシヤツをズボンから出して、ボタンもいくつか開けているラフな格好だ。何も言つてないのに部屋の中に入つてくるあたり、気の置けない間柄である。

「いやー、悪い悪い。ほれ」

「おー、サンキュー」

成美からティスクを受け取る。乱子にばれないよう適当なCDケースに入れておく。いくら色々とアレな乱子とはいえ、異性に卑猥な物件を見られるのは恥ずかしい。

「お話、終わりましたー？」

「はうあー！」

成美が面食らつたのも無理はない。乱子が出てきたからだ。友人の家に見たことのない幼女がいる。驚くなというのは無理な話だ。

「おい、ギセイさん、なんだこの子」

見られたからには仕方ない。事情を説明しておかないと誤解されてしまう。

「あー、色々と深い事情が……」

「深い情事！？ いやん、義成さん、そんな人前で……」

「何が情事だ、このたわけが！」

乱子の頭を思いつきりはたく。

「あ」

力が強すぎたのか、それともわざとか。乱子の首がもげた。

「はうあーーー！」

「…………うん。こいつはデュラハンの花房乱子。故あって居候してゐる

「いや、驚かせちゃってすみません」

「ああ、うん。こっちこそ……」

成美は最初こそ驚いていたが、次第に落ち着いてきたようだ。や

けに回復が早い。」こんなに冷静な奴だったか。

「……あれ、なるちゃん、あんまり驚いてねーな

「まあ、最初はビビッたけどな。ぶっちゃけ、ラミアが彼女つて友達がいるから……」

「「まあ！？」」

「ラミアといふと、RPGなんかに出てくる、上半身が女性で下半身が蛇というモンスターだ。そんなものが実在するのかと思つたが、田の前にデコラハンがいる。デコラハンがいるのならラミアがいてもおかしくはない。

なるほど、成美がそこまで驚かなかつたわけだ。

「ラミアとかマジでないですよ。下半身蛇じゃないですか」

「いや、デコラハンもないぞ。首もげてるじゃねーか」

「だな。そのラミアの子、上半身はすげー美人で、気立てもいいからな。確かにあの子には惚れるわ」

「氣立てなら乱子ちゃんも負けてないですよー」

「いや、氣立てがいい子は自分でそんなこと言わない」

とは言つたものの、乱子はなかなかよく動く。義成は何度か「これでデコラハンじやなけりや下ネタも我慢するのに……」と思つたことがある。

「まあうん、色々あるから、この件は内緒で頼むわ

「おう、わかつた。この様子だと犯罪の臭いはねえしな」

「信用ないなオイ！？」

「そりや可愛くてちつちつ女の子だからな」

「首もげてるけどな」

「そうだけど。まあ妹よりは可愛い」

「首もげてるのを『そうだけど』の一言で済ますなるちゃんとびっくりだよ」

「お褒めいただき光栄ですー。あ、せつかくですから、『J飯を食べ

てこきませんか？』

「お。じゅあ呼ばれてく

成美の適応力に驚きながらも、義成は居間に成美を通すのだった。

河合荘のすぐそば。

成美を見送る義成と乱子の姿を遠くから見ている少女がいた。赤毛のポニー・テール姿で、身長は低いが勝気そうな雰囲気だ。

少女は携帯電話を取り出すと、電話をかけ始めた。

「……あ、クロさんですか。つるぎですわ。……例の娘を見つけました。ええ、はい。引き続き監視は継続しますわ。本部に連絡を……え、もうメールを打つてらっしゃいますの？　さすが、速いですわね」

成美の原付が前を通ったので、道の端に身をかわす。

「ええ、わかっています。魔法少女本田つるぎの初仕事ですもの。へマなんかしませんわ」

つるぎと名乗った少女は笑みを浮かべると、携帯電話を閉じた。

#3・あの娘の彼（後書き）

今度は魔法少女ですか。

成美が言つてたラミアが彼女つていう友達は別作品を参照してください　ｗ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366q/>

鴨居は低くて結構だ！

2011年8月29日03時39分発行